

## 世阿弥を総合的に捉える

重田みち

記念の企画として書かせていただくこの拙文は、個々の事柄の追究ではなく世阿弥研究の展望について考えるところを述べたい。

学問を志す者として「前評判」を鵜呑みにしないことは基本である。しかし世阿弥については、取り組むほどに、その遺したものの大きさ、世阿弥研究の意義深さを実感させられる。そしてそれは、世阿弥を我々が或る一面からではなく、総合的に捉えること、全体という観点からよってはじめ成り立つと思いうに至っている。

「花」の概念にしても、『花伝』別紙口伝四郎本に見えるように、おそらく当時の大津将来の胡銅の花瓶等に生けた実際の花も意識されているが、以前指摘したように、発端は「詞の花（詞に花を咲かす）」という歌道の表現に基づいたもので、そこに右の禅文化の一環とも言いうる立花や、『人形』のやはり歌道に由来すると見られる梅桜の絵図、『至花道』追記の「百鳥花を啣む」という禅の想像上のイメージ等が重層していったものと思われる。立論

には既成の観念や典故を核としてしかしそこに留まらないすぐれた感覚や現実感を伴っている。ただし世阿弥はその傾向として耽美・享樂よりは理知・求道を選びがちであって、かつて西尾実氏が注目されたように、人物としての美点もそこに在り、それによって能樂を後代に遺したことは疑いない。少なくとも私自身その認識を次第に強くさせられてきた。したがって世阿弥を総合的に捉えるにあたっては、藝論ばかりでなく作能においても、その感覚面や背景とする社会とともに、否それと連関するものとして教養や思想の面に焦点を当てるのが不可欠であると考える。世阿弥に関する事柄を別テーマの参考に供することもむろんありうるが、それだけではな

ぶんもつたいない。

世阿弥のとくに藝論をひろく捉えた研究として、小西甚一氏の『能楽論研究』が挙げられる。表章氏の校訂注釈とともに並々ならぬ敬意を表したいが、同時に、いまの我々の立場に返れば、それは乗り越えるべきものでもあ

る。価値があるからこそ、これを土台に、むしろ乗り越えなくてはならない。実際、私の拙い学びや考えによっても、世阿弥研究にあたって重要な鍵となると思われる、足利義持政権期を中心とした世阿弥の著述の書き替えや新しい論及び能の改作新作とその意味について、また世阿弥の禅や中国古典に関する教養について補うべきことは多々あり、訂正すべきと思われる点も一部にあり、これと当時の聖俗の社会背景とを合わせて、世阿弥の世界の全体的な捉え直しが求められることになる。

小西氏が世阿弥をひろく捉ええたことには、わけがある。それは氏が、中国古典や欧米の解釈学を視野に入れられたからである。世阿弥の背景は、大陸の、とくに中国の文章や学問思想を抜きにしては考えられない。最近の文化研究の潮流に乗って、イメージや即物的事柄に過度に傾くことも世阿弥の像を歪めようが、国文学の主流であった実証的な方法も、有効な面があることは言うまでもないけれども、それが万能であるはずはなく限界を知ることが必要である。そのために、一つには学問史自体を省み、もう一つには欧州の方法論とその世阿弥や能楽の研究を知ることが有効であろう。また東アジアでも世阿弥や能楽への注目が始まっている。

したがって自戒を込めて實際的に言えば、今後世阿弥を人文学として総合的に捉えるには、少なくとも中国語及び国際語としての英

語の修得を要すると考える。中国語は漢文訓読では齒が立たない。現代中国語と文言(古典の中国語の両方を学ばなければならぬ)。漢文訓読は、読めたような気になって、その実あまり読めていないことが多いというのが私の感触である。中国古典の中国の学者による注釈や論考を読むのにも適していない。日本の漢文文献の解説にも十分でない。小西氏も漢文訓読ではなく中国語そのものに注目しておられた。日本に訓読資料があるのだから訓読の基礎と代表的なヲコト点の読みかたくらいは知る必要があるが、意味を咀嚼してはいない仏典や漢籍を「資料」として引用し、形式的に訓読するだけでは、その文献を読んだことにならないし、ましてや世阿弥を総合的に捉えることは難しがる。中国語を見ないことにするのは、いまや世阿弥研究に関しては、視界の半ば以上を覆われた闇雲の中をさまようようなものである。厳しいがこれが事実であると思う。しかもそれは、安易に中国人や中国学者・仏教学者等に頼るのではなく、できる限り自ら身に付けたい。近年は共同研究が盛んだが、人文学は本来、一個の人がどれだけ物事に習熟し総合的に捉えられるかに係っている。部分のつぎはぎで有機的な「一」としての全体を成すのは難しがる。学問交流の場は大切にしたいが、他者の力は基本的に、学校や師弟関係においてひととおりの学ぶか、書き物や報告を自身で咀嚼することに努めるべきであろう。そもそも世阿弥の世界は、そ

の能に表される当時の聖俗の社会や舞台における聴覚的・視覚的演出を下地とするのはもちろんだが、特別な教養として世阿弥は、和歌連歌や王朝物語とその学説、平家物語のほかに、声明の楽理、教禪一致の禪や中国古典ことにその文体、小学(漢字)や程朱学を含めた経学、詩、及び中国古典を背景とする神道家の説等を学び、しかも自身の立場から咀嚼した跡が能や藝論の所々に認められる。個々の表現だけではない。昨年亡くなられた横道萬里雄氏が解明整理に尽力された、世阿弥が規範を築いた能の段構成の秩序は、同人が中国の「理」に親しむことなくしては形成されなかつたろう。まさに「十体」を重んじ「担板漢」を退けた世阿弥ならではの世界である。その「十体」を自分も学ぼうとすることが即ち世阿弥を全体として捉える基礎となるはずである。

欧米の学問研究が有効なのは、解釈学の歴史があり、日本の国文学のこれまでの主流とは異なる観点からのアプローチが多いこと、また日本から離れている分、大所高所に立つて捉えやすいことである。それらに学ぶことは決して無駄ではない。もっとも盲従するのではなく、結局は世阿弥の原点に立ち戻り、そこから世阿弥に見合った方法を自身で見出していくほかはない。またもう一つ忘れてならないのは、欧米の研究者には世阿弥の翻訳に努めた人がいることである。私もいま世阿弥の藝論の現代語訳を自身試みている

が、紋切り型の逐語訳ではない翻訳とは実は大変なものであると思う。いかにわかつていなかったかに直面し、愕然とする。そのたびに読み直し、学び直しになる。小西氏の学問に関して特筆すべきもう一つは、能勢朝次氏と同じく、世阿弥伝書を『世子六十以後申樂談儀』を除きすべて現代語に翻訳された点である。世阿弥の場合その背景が広汎に及ぶため、翻訳文だけでなく注釈が必要だと考えるが、注釈付きの藝論の現代語訳ということは今後の大切な仕事の一つとしたいと、私は心中思っている。

このように、世阿弥を総合的に捉えることは、国文学の基礎はもちろんのこと、かつての水準とは較べものにならない教養を身に付けなければまともに取り組めないものと私は考える。しかしそれは学問が進んだ証であり、このような地平が現れたのはありがたく悦ばしいことでもある。学の修得もこの歳では不可能というものではなく、できないことはたいてい自身で壁を作っているにすぎない。もちろん自分がまだまだという謙虚さを失ってはなるまいが、一足の進歩を祝えるようでありたい。また学問そのものの在りかたを常に敬い考え、学問が健やかに行われる環境を保つていきたいものである。

以上、佳き節目に、不学を顧みず誌す。

(早稲田大学演劇博物館招聘研究員)